

## 高い執刀技術と保存療法で 膝痛に悩む患者を救う

### 東裕隆 理事長・院長

あずまひろたか / 1992年北大医学部卒業後、市立札幌病院救急部勤務。93年北大医学部整形外科入局。2000年カルガリ1大学(カナダ)留学。03年市立札幌病院整形外科副院長を経て、07年に開院。11年医療法人くわのみ会を設立し理事長・院長に就任。日本整形外科学会認定整形外科専門医。



### 医療法人社団くわのみ会 桑園整形外科

札幌市中央区北8条西16丁目  
☎011-633-3636  
<http://www.dr-azuma.net>



東理事長の執刀による小皮切での人工膝関節置換術の手術

ため、術後は2〜3週間で退院できる。例外はあるものの、約95%以上の患者が小皮切での対応が可能だという。

「小さな傷で施術することで、患者さんへの負担がかなり軽くなります。傷の痛みや精神的

不安をいかに減らせるかを第一に考えています」と話す。

優れた執刀技術を持ちながらも治療の基本方針は、極力手術をしない保存療法だ。手術ありきの治療ではなく、「患者本位」の診療を実践している。

「患者さんの肉体的・精神的な負担を考えれば、手術は可能な限り避けるべきだと考えています。筋力訓練や消炎鎮痛剤の使用、ヒアルロン酸注射、日常動作の指導などを優先的に実施しながらその効果を十分観察し、痛みが解消しない患者さんの最終手段として手術を提案しています」

スペシャリストとして全国屈指の治療技術を持つ専門医だ。

高齢化社会となった近年、膝の痛みで悩んでいる人の数は、国内に1000万人以上いると言われ、その内60歳以上の患者の約6割が今後、変形性膝関節症を経験すると言われている。

その診断と治療に多くの実績を持つ東裕隆理事長は、膝痛治療の



小皮切では、傷は5〜9センチと小さい上に、さほど目立たない

は179件と年々増加している。執刀における大きな特徴は、「小皮切(小さい切開傷で人工関節を膝に設置する手法)」による

手術法を用いることだ。従来の手術では、15〜30センチ程の傷で筋肉組織を大きく切開するため、術後の回復に1〜2カ月間の入院が必要だった。一方「小皮切」では、5〜9センチ(平均7・5センチ)の傷で済む上、筋肉を切開せずに施術する